

<フォーラム>第2回例会（シンポジウム） 「沖縄で研究すること 沖縄を研究すること の意味」開催報告：第2回例会（シンポジウ ム）・パネルディスカッション

小原, 丈明 / KOHARA, Takeaki

(出版者 / Publisher)

法政大学地理学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

JOURNAL of THE GEOGRAPHICAL SOCIETY OF HOSEI UNIVERSITY / 法政地理

(巻 / Volume)

55

(開始ページ / Start Page)

75

(終了ページ / End Page)

79

(発行年 / Year)

2023-03-20

第2回例会（シンポジウム）・パネルディスカッション

小原 文明

中俣均、長谷川均、柴田健、崎浜靖の各氏による講演後、演者の4氏（一部、フロアからの参加者あり）によるパネルディスカッションを実施した（進行役は集会委員長の小原が務めた）。以降では、パネルディスカッションの内容を要約する形で紹介する。なお、要約する際、筆者によって言葉を補う、あるいは別の言葉に置き換えるなどの加筆修正を行っている点をご了承いただきたい。

I. 沖縄研究のきっかけ

崎浜：仲松弥秀先生の影響を受け、文化地理学、集落研究を志向し、立正大学の地理学教室で学んだ。卒論では国頭村の集落について、修論では渡名喜島の人口流動について研究した。南島文化研究所に入ってから他分野との関わりが中心となっているが、マラリアによる社会変動の研究にも従事している。

中俣：1984年に法政大学に着任し、当時は沖縄文化研究所との関わりはなかったが、後から考えると沖文研に関わる宿命であったと思う。沖縄研究のきっかけについては、沖文研50周年の紀要（2022年度末発行）に書いたもので、そちらを参照して欲しい。沖縄には1975年の海洋博の際に初めて訪れ、その5年後には八重山を訪問した。当時、那覇と宮古、石垣では発展の差異が感じられ、そのような発展の局面（フェイズ）の差異を文化地理学の視点から明らかにしたいと考えた。ただ、当時は何も知らず、一から学ぶ必要があったので難しかった。なるべく大きな島ではなく、小さな島を研究フィールドにし、コツコツと歩いて回った。有人島が50弱あるが、4島を除いてすべて歩き回った。

長谷川：久米島には1982年の総合調査で訪れ、最近、再び通うようになったが、当時と最近とは状況がまったく異なっている。1980年

代はじめの久米島はまさにバブルであり、島全体が浮かれていた。島のメインストリートには煌びやかなキャバレーなどの飲み屋があった。しかし、ブームが去り、観光客が激減したためか、現在の久米島にはそのような飲み屋はほとんどなく、落ち着いた良い島になったと感じる。逆に、現在の石垣島や那覇は浮かれすぎて、落ち着きがない印象を受ける。いずれ、石垣島も落ち着きを取り戻して欲しいが、沖縄の人にとっては金回りの良い現在の状況が良いのではあろう。ただ、石垣島でも経済的な恩恵に与っている人とそうでない人とに分断されてしまっているのではないかと考える。

柴田：1968年の高校2年生の文化祭にて、東京にあった沖縄資料センターで資料収集を行うなどして、沖縄返還に関する研究発表を行った。1980年に地理教育研究会大会が沖縄であったので、その時に初めて沖縄を訪れた。元々、平和教育に関心はあったが、当時、知花昌一さんを中心として沖縄戦を再び思い起こす運動があり、それらに関わった人から話を聞くなどして勉強した。神奈川県の高校の教員であったので、自分で学ぶだけでなく生徒にも学ばせたいと考え、1980年代中頃から沖縄修学旅行の実施を企図し、県の教育委員会を説得して1993年に実現した。沖縄修学旅行を希望する学校への情報提供を行う際にさまざまな資料を作成する中で、沖縄に深く関わるようになっていった。1990年代に入ると、沖縄平和ネットワークなどの市民団体が発足し、その活動にも関与するようになり、少しずつ、首都圏と沖縄とのパイプ役を担うようになっていった。

小原：初めから沖縄に関心があったパターンと、沖縄を訪れてから沖縄研究に従事するパターン

とに分かれるようだが、どちらにしろ、沖縄は研究者の関心を引き付ける場所であるといえるかと思う。

中俣：自身が指導した学部生、大学院生を結果的に沖縄研究に引っ張っていった面がある。指導を通じて、沖縄への思いを伝えていたのかもしれないか考える。

小原：本日の聴衆の中では、前畑先生は中俣先生の下で学ばれて沖縄研究に従事されていたかと思う。そこで、前畑先生にも沖縄研究のきっかけについて一言いただきたい。

前畑明美：沖縄の文化に憧れていて、20歳の頃、沖縄中部の青い焼き物を観に沖縄を訪れた。その際、米軍基地を目の当たりにし、衝撃を受けた。沖縄研究という点では、その後に大学院にて島の架橋による変容に関する研究に従事するようになってから取り組むようになった。

II. 沖縄研究の面白さ・難しさ、特異性・独自性

中俣：異文化に対する感受性を有している人が沖縄に関心があると思われる。ただ、21世紀になってからは基地問題に焦点が当てられすぎてしまっている印象である。本シンポジウムのテーマにある沖縄で研究する、沖縄を研究するという点については、柳田國男が同じようなことを言っている。また、琉球大学には島嶼地域科学研究所があるが、島で研究することと島を研究することの区別を付けるのが難しい。ともかく、沖縄研究に限らないが、研究を行う上では異文化に対する畏怖の念のメンタリティが大事か考える。

長谷川：自然に対しては、今あるものを壊すような研究をしてはならないと考えている。しかし、若い研究者の中には、サンゴ礁を巨大な実験水槽として考えているような姿勢でいる者もあり、そのような姿勢に対しては嫌悪感がある。観測機材や調査機材を海中に放置したままフィールドを去る研究者もあり、腹立たしい。沖縄だけではなく、自然に対する畏敬の念を持たず、研究成果さえ出せば良

いと考えているような者にはフィールドに足を踏み入れて欲しくない。

崎浜：この20年ほど南島文化研究所の仕事で各地を訪れ、行政関係者や地域の区長と会うが、その際に調査公害の苦情についての話を聞くことが多い。それゆえ、研究所にて地域調査を行う際には他のメンバーにも留意するよう伝えるようにしている。また、地域調査を行った際には、その年の3月に地元で調査報告会を開催し、地元の人の意見を伺う機会がある。そこで出された意見を踏まえて改善し、次の調査に臨んでいる。沖縄には地域差があり、それぞれの地域の関係性を大事にする必要があるため、調査の際には慎重に行動するよう心掛けている。自身では分かっているつもりでいるが、それでも足りない面があったと気付かされたこともある。

柴田：大学で教えている際に学生を沖縄に連れていったことが4回あり、合計で30人ほど連れていった。その現地学習の終了後にレポートを提出させている。その内容を振り返ると、現地ではそれぞれの場所で直接関わっている人に案内をしてもらっていることもあり、学生は理解できているように感じられ、一定の成果があったのではないかと考える。高校の最初の卒業生の中には、辺野古の問題で沖縄タイムズにコメントを出している行政法の研究者もおり、少しは影響を与えてきたのではないかと考えている。

小原：沖縄研究での面白さに関する何か具体的なエピソードについてはどうか。

崎浜：沖縄は東西1,000 km、南北400 kmほどあり、その中に有人島が40余りある。その中で大東諸島は最初に八丈島出身者が入ってきたが、その後は沖縄本島からの移住者が多かった。そのため、言語や祭りなど沖縄本島の文化と融合しており、沖縄研究の中では特異な島であると感じる。

中俣：石垣の人は、「今日、沖縄に行ってくる」と言うことがあるが、これは石垣の人が自分たちは沖縄ではないと思っていることを表している。宮古でも同様である。ヤマト（本土）

の人たちは沖縄を一括りにしがちであるが、実際はそうではないという点は重大な認識であると考えている。一方で、本土と沖縄との違いと、沖縄の地域間での違いの程度を比較すると、やはりその程度に差異があることを感じることもある。ここ10年ほど、日本地誌の授業では沖縄を題材にしている。地域の違いや多様性を学ぶには沖縄は良い素材であると考え、それを学生に気付かせたいとの思いで授業を行ってきたが、最近の学生はそのような差異に対する感覚が希薄だと感じる。例えば、歴史において、沖縄は日本ではなかったと話をすると、驚く学生がいる。

崎浜：本務校（沖縄国際大学）では「沖縄の地理」という科目を担当しているが、沖縄の学生、とりわけ本島の都市部の学生には離島に行ったことのない者もあり、地域間の差異にピンとこない者も多い。そのため、授業ではそのような差異に気付かせることを意識している。

Ⅲ. 他地域との繋がりで考える沖縄研究

長谷川：本務校（国士舘大学）の地理・環境コースには「沖縄の自然環境」という授業がある。その授業の冒頭において、沖縄のサンゴ礁は大陸のサンゴ礁とは全然違うと指摘するようにしている。船で半日かけて移動しないと辿り着かないグレートバリアリーフのサンゴ礁に対して、沖縄のサンゴ礁は汀線から泳いでいけば辿り着くことができる点で大きく異なっている。実際、白保で調査をしていた際、現地の人はサンゴ礁に「おかずを取りに行く」と言っていた。このような話を基に、沖縄の独自性を伝えていきたいと考えている。

柴田：江戸時代に幕府の支配が及ばなかった地域、つまり北海道や沖縄をきちっと見据えることによって、日本社会の多様性や異質性を理解できるのではないかと考える。勉強すればするほど、沖縄は日本とは違う地域であることを認識させられる。高校における沖縄の修学旅行に関して話をすると、沖縄のことを好きにならなくても構わないが、リピーターに

なって欲しい、何度か沖縄に行くことにより、本土との違いが分かってくるということも伝えている。このようなことが言えるようになるために、沖縄において本音で話ができる知人を増やしていくことを続けてきた。それが現在の自分の財産になっている。

中俣：中心ではない所、辺境と位置づけられがちなのは時として重要な場所として取り上げられることがある。目の前の都市を見ているだけでは、どんな国や地域もそれだけでは理解できないはずである。華やかな面があれば、陰もあることを意識しておくことが、地域の見方としては大事であると考えている。沖縄が遅れているとは考えていないが、本土の中には実際にそのように考えている者もあり、そのような世の中はおかしいと感じている。

崎浜：民俗学的に沖縄と韓国の光州が似ている点があり、南島文化研究所では全南大学校湖南学研究院と協定を結んで比較研究を行っており、毎年交互で講演会を開催するなど、20年ほど交流してきた。韓国はかつて日本の植民地であり、沖縄は米軍の支配を受けてきた。そのような植民地としての陰の部分について、韓国側では文学や歴史学、民俗学において、沖縄との比較研究をする者が増えている印象を受けている。このように、比較研究の中で交流を密に行っている。また、中国の福建省との繋がりでは、かつて福建から沖縄に多くの者が移住し、同地から多くの文化がもたらされた歴史があるので、歴史学や考古学の研究者と交流がある。さらに、韓国の済州島においては、ここ10年ほど、島という点で沖縄との比較研究を行っている。それらの共同研究については報告書を刊行している。

Ⅳ. 沖縄研究とは

小原：まずは、聴衆の皆さんからの質問や意見を伺いたい。

齋藤圭：長谷川先生への質問であるが、サンゴ礁を守る過程で土砂の流出が重要であることはよく理解できたが、一方で海底からの地下水の

流出の影響についての研究の動向はどうか教えて欲しい。

長谷川：おそらく、海洋化学の分野で研究がなされていると思われる。それほど詳しくはないが、サンゴ礁の浅いラグーン（礁地）の中の湧水は重要であると考えている。陸域で開発がなされると、その部分の地下水の流れが大きく変わる。特に、カルスト地形では地下水脈が網の目のように広がっているため、構造物ができることにより地下水の流れが遮断されてしまう。サンゴ礁の中でどのくらいの湧水量があるのかを計測することは、タッパーにホースとビニール袋を取り付けた簡単な装置で実施可能である。そのように地道に測定を行えば、サンゴ礁内の湧水量を測ることができ、湧水のサンゴ礁への影響を調べることができる。以前に西表島でそのような調査を計画したことがあるが、マンパワーが足りず、行うことができなかった。そのような研究は面白いと考える。また、最近の研究では海洋に溶け込んだ二酸化炭素がサンゴに悪影響を与えるとの報告があるが、その研究については詳しくない。

齋藤：自身の研究ではあるが、現在、大分の国東半島の沿岸域の湧水について、漁業との関係で調査を行っている。その結果、従来の研究以上に湧水の影響が大きいことが分かってきた。長谷川先生の指摘された低コストでの調査方法は有用であると考え、また、示唆が得られたので興味深く聴かせていただいた。

前畑：自身の予想としては、どの演者の方も、島は日本の縮図であると指摘されると考えていた。実際、中俣先生や柴田先生の講演の中にはそのような指摘があった。また、崎浜先生が人の移動について触れていたが、人口移動は日本全体の問題であり、換言すれば、大きな島と小さな島との島嶼間の関係性ということであり、沖縄をさまざまな側面からみていく点において、大きなポイントではないかと考える。長谷川先生のサンゴ礁の問題においても、域内の循環だけでなく、島嶼間の関係性も関わってくるのではないかと考える。自

身の研究とも関連し、陸域同士の関係性を研究の根幹として考えていくのが重要ではないかと思っているが、その点について、沖縄在住で沖縄について研究されている崎浜先生はどのように考えているのか意見を伺いたい。

崎浜：妻の家族は伊平屋島から本島に移ってきた。戸籍は本島にあるが、精神的な意識は伊平屋にあるようであり、墓参り等で密に行き来している。このように、島嶼間の関係性という点では本島に依存しているものの、心の中では生まれ育った場所に対する意識が強い人が多いと考える。沖縄では、最近では衰えてきているが、郷友会の活動が盛んである。最近、宮古島で祭祀の行事を巡る問題が起きたが、その問題に対して、宮古島から本島に移動した人達が厳しい意見を述べたりしていることなどは、小さな島から大きな島に移っても心の依りどころが小さな島にあることの一例かと考える。それゆえ、子世代や孫世代が何らかの機会に親の故郷に移ることがみられる。ただし、最近はその点は薄くなってきている印象である。

前畑：全体的な繋がりや双方向的な繋がりというのが出てくると、沖縄の研究において、さまざまな問題の解決に繋がるかと考える。

小原：では最後に、演者の皆さんにとっての沖縄研究とはどのようなものであるのか一言で述べていただきたい。

長谷川：私にとって沖縄研究とは、研究者人生そのものである。

柴田：私の存命の間に、沖縄が他の都道府県と同じ位置になるのか、あるいは別の道を歩むのかという点を見据えることができれば良いと考えている。沖縄の人にとって、どちらが良い（まし）であるのか考えていきたい。

崎浜：私を含め、沖縄に住む者にとって、より良い沖縄となるように、研究者として貢献できるように頑張っていきたいと考えている。

中俣：ここ数年考えているのが、沖縄研究は、沖縄ではない日本であるヤマトがまともな国に成れるかという点を測る試金石ということである。つまり、あからさまなヘイトをぶつけて

も知らんぷりであることや、あるいは沖縄に無関心であることは、沖縄に対しての影響だけでなく、何事に対しても関心が非常に狭くなる点や自身の生活空間への認識がなくなるなど他の事柄にも及んでいると考えられる。それらについてヤマトの人たちがどれだけ改善できるのかという点を沖縄によって測ることができると考えている。

小原：最後の中俣先生の指摘は、柴田先生や前畑先生が述べられていた沖縄は日本の縮図であるという点に通じると考えられ、非常に重い命題であるといえよう。

以上、要約する形ではあるが、ディスカッション

の内容を記した。本来ならば、パネラーをはじめとする発言者の言説通りに文字化の方が望ましいかと考えるが、誌面の分量の関係や筆者の能力の関係で、このような形でまとめることになった。それゆえ、発言者の実際のニュアンスとは異なる点があるかと考える。その点の責任は筆者にあることをお詫びするとともに、ご海容いただきたいと願う。

最後に、本シンポジウムの開催を通じて、沖縄研究を志す人が出てくること、あるいは沖縄に関心を寄せる人が増えることを切に願いたい。そして、次の世代に繋がる沖縄研究が生まれ、また、これからの沖縄、そしてこれからの日本を考えることに繋がっていただければと考える。